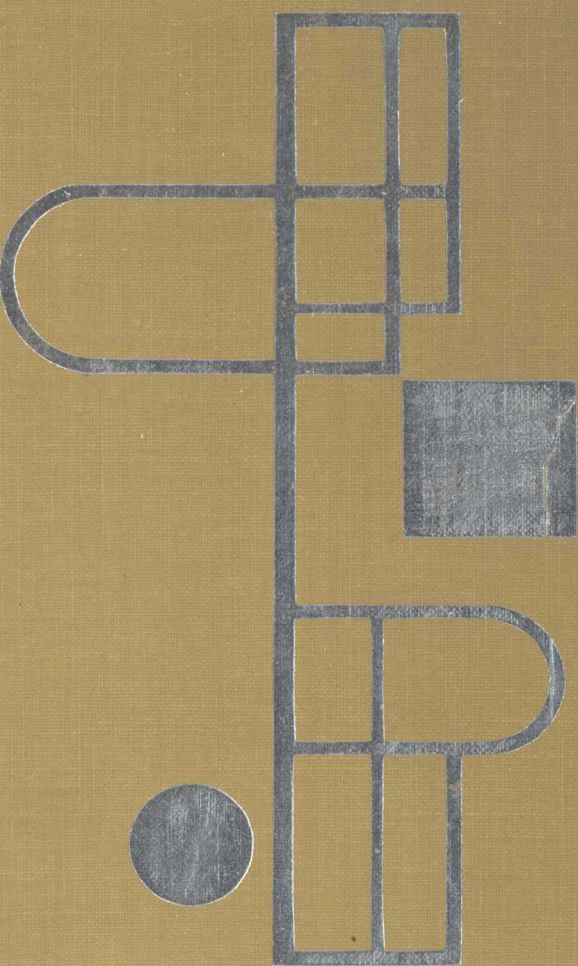


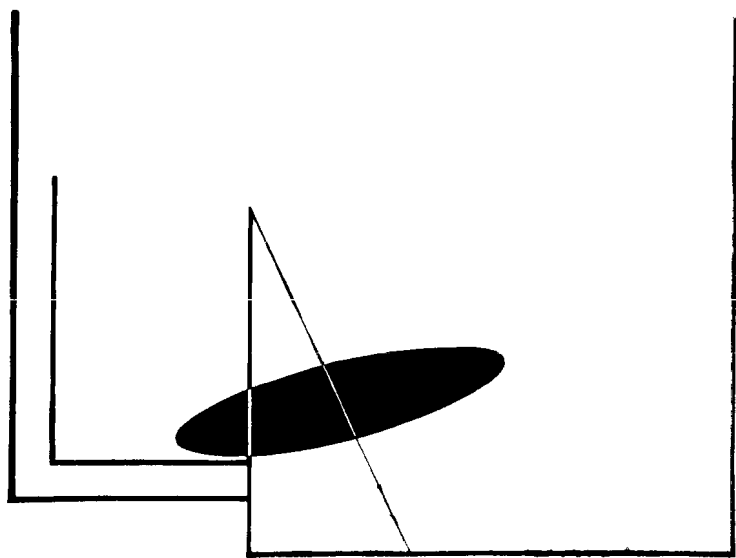
正宗白鳥集(二)



現代日本文學全集



正宗白鳥 集 (二)



筑 摩 書 房 版

正宗白鳥集 (二)

昭和三十三年九月一日 印刷
昭和三十三年九月五日 發行

著者 正宗白鳥
まさむね はくてう

發行者 古田晁
東京都千代田區神田小川町二ノ八

印刷者 山田一雄
東京都青梅市根ヶ布三八五

發行所 筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二ノ八

〔電話〕東京二九局(29) 七六五一(代表)
振替 東京 一六五七六八

製印整 版株式會社
刷株式會社
本株式會社
牧製本株式會社
興社

正宗白鳥集(二) 目次

徒勞……………五

毒……………一〇

毒婦のやうな女……………七

人を殺したが……………一〇三

六十の手習ひ……………一六

戦災者の悲しみ……………一七一

日本脱出……………一七

天使捕獲……………三三

自然主義文學盛衰史……………三四三

正宗白鳥論(青野季吉)……………四一〇

解説……………四二五

裴
頓

恩
地
孝
四
郎

正宗白鳥集
(二)

日本脱出

正宗白鳥

一

場所は輕井澤としてもいい。那須野ヶ原にしてもいい。或は山中湖畔としても差支へはないのである。時は戦時中の或夏のことである。數人の田力女が女を忘れて女を楽しもうと企てたことがあった。

女を忘れると云つても今日の時勢である。今日の人間である。彼等の夢見る力は高が知れ

徒勞

一

電車は絶間なく騒しい音をして、直ぐ下を走つてゐる。冴えた午前の日光が汚れた格子から斜めに差込んだ。

押入が突出て、鴨居が曲つて、襖の代りに熨ぶつた障子は嵌つてゐて、二室續きのこの二階の部屋は見るから不恰好だ。廣い方の部屋は何一つ置かれてゐないが、階子段の側の狭い部屋には粗末なテーブルと椅子とが壁際に据ゑられてゐる。薄い座蒲團と安火とのあるのも部屋に相應しい。一寸見ると苦學生が室借をしてでもゐるやうに思はれるが、その實此處の主人公はそんな苦しい境涯にゐるのではない。三十四歳のこの年まで、只の一錢だつて自分の腕で儲けたことはない。先々月親の家を離れて此處へ移つてからも、月々十五圓づつ仕送つて貰つてゐる。十五年前に或私立學校の政治科を中途で止してから、碌に書物を讀みもせねば、以前に學んだ事をも大抵は忘れてしまつた。折々テーブルに向つて何か書散らしたり、天主教に關係した二三の書籍を開けて見ぬでもないが、それが

一時間とも續いたことがない。讀んでゐること、書いてゐることが明かに頭に入りもしない。毎日戸外へ出て昔馴染の教師や友人を訪ねて歸ると、押入から夜具を引出して、それに括まつて寝て、強い近視で凹んだ濁つた目を据ゑて、何處ともなく眺めては、電車の音も耳に入らぬほどの深い空想に沈んで行く。そして倦むこともない。飽くこともない。十年一日の如く希望が目の尖に燦いてゐる。

彼れは十年前雜司ヶ谷の畑の中の一軒家で、神の聲や魔物の聲を聞いてから、世界が全て違つて見え出した。その當時から學課を抛つてしまつた。獨り森の中を散歩したり机の前に正坐したりして、人間離れた聲に耳を傾けては考へた。檐の葉がカサ／＼音をさせても、その音につれて神の聲が聞える。

「亞米利加へ行け。亞米利加へ行けば手易く巨萬の富が得られるぞ。その金で貧民救護所を建てよ。日本政府の誤つた施政方針を正して、日本の貧しき國民を救ふのが、汝、澤井壯吉の使命である。」

その言葉は日に／＼彼れの心に刻まれて、次第に聞棄てにされなくなつた。經濟學や憲法論を安閑と學んでゐる時ではないと思はれた。で、故郷の父へ手紙を寄せて大抱負を述べ、巨額の旅費を請求したが、その手紙には不穩の文句が多かつた。父は驚いて、東京の親戚に頼んで彼れの様子を索らせて、いよ／＼普通外れの行爲を見届けた學句、無理強ひに故郷へ引戻した。

それから十年の長日月、壯吉は中國の山間に若い盛りを送つた。數ヶ月は精神病院へも入れられて、偏執狂の病名をつけられた。東京の知人とはい端書一枚の遺取りもせず、この世に亡き者と噂されてゐたが、去年の秋の末ヒヨツクリ墓から出て來たやうに知人の前に現はれた。

「君にこの世で會はうとは思はなかつた。よく長い間田舎にゐられたね、何をして暮らしてゐたの。」と、昔彼れを新橋に見送つた親友の口笠は、訝しさに堪へぬやうにその顔付や素振りを見たが、壯吉は平氣で、

「彼地では天主教を研究しました。先づ人間の根柢を究めねば駄目ですからね。」と云つて、天主教の有難味を説いた。

「ぢや貧民救護所の方は當分見合せたんですか。」

「どうして、見合せる所ぢやない。一日だつて忘れたことはありませんよ。」

「しかし、もう十年にもなるぢやありませんか、少しは着手したんですか。」

「なに、着手しようと思ふと何時でも出来るんですがね。さう早く客臭いものをつくるよりは少々遅くなつても大組織にやる方がいゝんですからね。それにはあらゆる方面の知識を吸収して、自分を完全無缺にしてから着々歩を進めなかつちや駄目です。先づ人間は宗教で心を神聖潔白にしなくちゃならんと思つて、私は一番高尚な天主教に入つたのですが、この次には、政治を研究します。田舎でも少しは政治上の活

動をやりかけたんですよ。しかし田舎は迫害がひどいですね、私の政治思想は君も知つてゐられる通り過激な點がありますからね。」と、急に聲を潜めて、「探偵がつけて五月蠅くて仕様がありませんでしたよ、だから半蔵ばかり私は尼寺に隠れてゐました。東京ではどうでせう、矢張我々に探偵が後をつけるでせうか。」

「なに東京ではそんなことはないでせう。」

「さうですか、心配は入りませんか。」と、くどく訊いて、稍々安心して、「近々政黨に入らうと思ひます、政治研究のためにはそれが便利ですから……さうして四五年政治をやつたら實業界へ入るつもりですよ。日露貿易をやつて、勞ら政治上でも日露の親睦を計らうと思ひます。貧民救護はそれからでさあ。」と先の長い計畫を語つた。

彼れは東京に居残つて居る僅かの知人の住所を日笠に訊いて、順々に廻つては自分の抱負を語つた。その時父が郡長を辭したため、家族を學つて東京に移轉したので、まだ新宅や荷物の整理がつかないのに、彼れ一人は家の用事に手出しをせず、毎日小遣錢を貰つては、忙しさうに知人の訪問をしてゐた。

その中、父の家にゐては自分の業務の妨げと感じて、一人家庭を離れて、この魚屋の二階に住むことにして、父の家へは減多に出入をもしない。

二

今日も壯吉は朝から、或先輩の哲學者を訪ねて、日露貿易を論じてゐたが、正午近くなるのに氣付いて、盡きぬ話中途から切つて歸途に就いた。山高帽を被り五つ紋の木綿羽織を着て、ステッキを持つて江戸川端を歩いた。花は名残りなく散つてをれど、温かい日曜の今日、青葉の下を散歩してゐる人は多い。川の中も賑かだつた。しかし壯吉の目には周囲の鮮かな色が明かに映らない。何の感じもなく素通りしながら、心の中で哲學者との會話を繰返した。將來日露同盟が成立して、世界は屹度日露で統一される。日露大帝國が將來の世界だと、おれが云ふと、彼奴驚いて、そんな馬鹿々々しい空想を抱いてつちや駄目だと云つた。日露貿易もいゝが餘り空想に走らないで、手近な所から着々始めたらどうだらうと意見した。君は餘程現代の思想に遅れとる、主義や理想に忠實な所は敬服だが、さう精神が一つ處に停滞して、自由な發達を妨げられては困ると云つた。確かにさう言つた。今は哲學でも抽象原理や形式的理論を繰返しては駄目だ。生活の指南車としての哲學を欲するのだ。レーベンスマハトとしての哲學が必要なんだと、五月蠅い哲學の議論をした。だけど彼奴には我々の遠大な抱負は分りやしない。時代の思想に遅れるの何のと、そんな呑臭い量見で何が出來よう。

あの男もあんな腐れ儒者ではなかつたがと、獨言を云つて、ふと立留まつた。そして首に掛けた紐を手繰つて、懷から大きな臺口を出して、

目を凝らして一々中を改めた。僅かの銀貨と銅貨の外に、守本尊ペテロの小さい彫像、マリヤの旗、數珠と印とが紛失もしないで元のまゝに入つてゐる。確かめて安心して再び懷に收めて、坂道を急いで上つて、魚屋へ入つた。

「歸りました。」と、上り口に腰掛けて子供に乳を飲ませてる女房さんに、帽子を取つて會釋した。

「お辨當がそこへ來てゐますよ。端書もあるでせう。」女房さんは首を曲げて後を見て不愛想に云つた。

「どうも、お世話様。」と、壯吉は柔しい聲で慇懃に云つて、弱い目で其處等を索つて、黄ろい辨當箱を見つけた。葉書をその上へ載せて、柱時計の側に擦寄つて見て、「もう十二時過ぎだ。」と驚いたやうに獨言を云つて、忙しさうに二階へ上つた。

羽織を脱いで袖疊みに疊んで、押入の中へ入る、部屋の中に胡坐を掻いた。心で神に感謝して辨當の蓋を取つた。厭な臭ひのするもの構はず、舌鼓を打つて隅々までほじくつて食べた。空いた箱は階子段の側へ置いて、茶も飲まないで、コロリと横になつて疲れた足を伸した。そして指先で端書を引寄せて見たが、それは海邊の繪葉書だつた。小さい字が繪を取巻いて書かれてある。

僕は今朝和歌山からこの土地へ來た。霞のやうな春雨に傘も翳さないで、松林の中を歩いて海邊へ出た。砂の上にボートが横はつてゐ

るのみで、左右に人影がない。海は音を立てず穩かだが、遙か彼方^{あそこ}を濃い雲に遮られて、その奥の方が物凄く見える。見詰めてゐると、今更のやうに世の淋しさが身に染みた。君を初め東京の知人が懐しくなつた。(濱寺より、日笠生)

壯吉は二度繰返して讀んだ。やう／＼その意味を知つた。此處へ移つてから、嘗て一度だつて端書や手紙に接したことはないで、物珍らしさうに暫らく手から離さず、つく／＼繪を見詰めながら、聲をも出して讀んだ。日笠だけはおれの説を理解してゐる。昔から友人の中で話せるのはあの男ばかりだつたと、その歸京が待遠しい氣もした。

繪葉書の繪は彼れの頭に次第に大きく映り出した。黒い雲に蔽はれた波打際と日笠が長い鐵の杖——學生時代に彼れが日笠に與へたもの——を提げて歩いてゐる。その海には露西亞^{露西亞}の汽船が纜を解いて乗出してゐるらしいも見た。雲の奥には露西亞の大陸が横はつてゐる。

格子の下から聞える電車の響と共に、大海の波音が何處からか湧いて来る。夢のやうな現のやうな二三時間を壯吉は送つてゐたが、不意に「兄さん。」と若々しい男の聲がして、障子が開いた。弟の眞造が角帽を被つて袴を穿いて其處に現はれた。壯吉は夢から呼醒されたやうに慌てて起きて、弟の前に座蒲團を押付け、「疊が汚れてるからこれをお敷きよ、學校へ穿いて行く袴が汚れちやいけなから。」と、柔しく云

つて、強ひてそれを敷かせて、「今日は緩く遊びでおいでよ、もう用事はないんだらう。」

眞造はそれに答へず、兄の落着いた顔をジロジロと見ながら、「随分騒々しい處だね、よく辛抱してゐられるね、僕なんか一日もこんな家で勉強出来やしない。」

「さうかい、おれには此處の方がいいがなあ、家にゐるよりや。」

「僕だつて此頃はゐたくないさ、厭な事はかり目に付いて仕方がないんだもの。」と、眞造は力を籠めて云つた。

「厭な事がありや此處へ來て勉強するといふ。この隣の部屋も空いてゐるんだから。」

「だつて僕は家を出られやしないさ、家の始末は何も彼も僕一人でつけなくつちやならないんだもの。兄さんの方が餘程氣樂だ。」

「お前もコセ／＼せずに氣樂にしてたらい／＼ぢやないか。おれの事業が極りがつき次第、お前にも多額の收入のある仕事を分けてやるよ、安心して勉強しておいでよ。」

「僕一人の事はどうでもいいけれど、家に財産が無くなつたら、兄さんはどうします、どうして生活します。」

「そんな心配は入らんよ。おれは政治研究の手段として新聞社に入るつもりだ。△△新聞の社長に頼んで、この隣にある△△新聞小石川支局へ出勤することにしたんだが、まあ當分見習ひのつもりで通つて、將來主任記者になる準備をしようと思ふ。政治や實業をやるにも、一時新

聞記者になつとくと、非常に便利な事があるんだつて。」

「本當に社長が使つてやると云つたのですか、そして仕事は何をやるの。月給も呉れるんかね。眞造は不審がつた。」

「なに、月給なんかどうでもいいさ。」壯吉は僅かの給金など口にするのも厭だと云つた風で、「當分無給で働くつもりさ。昨日は集金掛りについて方々を廻つたがね、あの新聞は随分よく賣れるんだよ。」

「そんな事は記者のする事ぢやないだらうが。」だつて新聞に入る以上、何でもやつて見なくちや駄目だよ。配達でも集金でも採訪でも、新聞に關係したあらゆる事をやつてから、立派な主任記者になれるんだらう。お前はさう思はないかい。」

「どうか。」

「おれは天主教を十年研究したんだからね、何をやるにも基礎から堅めて行かなくちや。」と、壯吉は蒼黒い角張つた顔にニヤリと薄氣味悪い笑ひを湛へた。そして「御馳走しようかい。」と元氣よく云つて、慕口を持つて階下へ降りた。

眞造は眉を蹙めて頼杖をついてゐたが、ふと立上つて格子際に添うて戸外を眺めた。兄は電車道を横切つて、向側の紅谷の店先に立つてゐる。頻りに指差しして竹の皮に包ませてゐる。思ひなしか後姿は實に見えた。包を持つて穩かな日光の中を歩いて来る顔形は、あの父と母との生んだ子とは思はれない。家族の誰れにも

似てはゐない。

唯一人の兄、唯一人の相談相手が、あの肩を揺ぶつて歩いてゐる男なんだ。蠅のやうな目で自動車の後を見送つてゐる男なんだ。眞造はそれを見てゐると、今更のやうに手頼りない感じが胸に迫つた。崩れかゝつた家を支へて行くのは、自分の纖弱い腕一つである。自分が離れたら四五人の家族は皆惨ましい境涯に陥らねばならぬ。それが今日の前に見えてゐるやうだ。

眞造はこの二三日家庭の不快な空氣に堪へなくなつて、つい兄に會つて訴へたらばと思つて來たのだが、兄は矢張元のやうな兄で、眞面目な話など出來さうではない。と云つて、縁の遠い親類や友人に打明けて相談されることではない。

彼れはわざ／＼此處へ來たために一層心が滅入つた。兄の顔を見たために苦痛が更に増した。「さあドツサリお上りよ、旨さうなのを選つて來たんだよ」と、壯吉は色の赤い餅菓子を一つ摘んで頬張つた。お茶も階下から貰つて來て弟の前に置いた。旨さうなのを取つて強ひて弟の手に渡し、その食べるのを悦しさに見た。「兄さんは何かして少しでも金の取れる工夫はないだらうか」。眞造は睦じい兄の素振りを見えます／＼兄の行末が案じられた。

「少しぢやない、ドツサリ金儲けをするつもりだよ。親爺にもさう云つて安心させといってお呉れ。月々幾らかづつ貰ふのも當分の内だよ。どうせおれは相續權がないんだから、財産も皆お

前のものだけけど、當分その中から貸して呉れたつていいだらう、幾十倍にでもして返すんだからね。」

「僕は相續權を譲られて些とも有難くはなかつた。兄さんの思つてゐるほど財産はありやしないし、あつたつて當てにやしない。」

「だつて一萬や二萬はあるつて、お前が云つてたぢやないか。」

「だけど、親爺に職はないし、皆居喰ひしてちや駄目だ。それに親爺は自分だけ別居するつもりでゐるらしいんだ。自分は二十歳位から親の手を離れて、獨りで生活して學問して來たんだから、子供も獨りで好きなやうにやればいい、と云つてゐるんだもの。」

「それでいいぢやないか、おれも好きなやうにやつて來たんだから。」

「兄さんはそれでいいさ、だけど僕はどうします。まだ學校が二年も掛かるし、お種やお母さんの世話も一人でしなくちゃならんのだし。」

眞造は瘦せた顔の黄ばんだ癩の高ぶつた母と、胡麻鹽頭の肥つた父とが、其處に、兄の側に動いてゐるやうに思つた。だが、兄には立入つて家の様子を話しかねて暫らくして二階を下りた。

三

戸外へ出て自分の家へ歸りかけたが、ふと此頃懇意になつた兄の友人の日笠を思出して、氣晴しに訪ねて見る氣になつて、引返して目白臺のその家へ行つたが、日笠は旅からまだ歸つて

ゐなかつた。「あの人も氣樂だ、一人ぼつちで繫累もなくて勝手な事をして」と、その身の上が羨ましくなつた。昨日から誰れに會つても誰れを見ても、皆自分より幸福な人のやうに思はれるので、陽氣な學友に會つて、平生のやうな浮いた話をする氣になれぬから、近くにゐる友人の家へも立寄らないで、ブラ／＼雜司ヶ谷から護國寺のあたりを歩いて、日暮方に竹早町の家へ歸つた。

父も母も妹も茶の間に揃つてゐて、平生と違つた様子は見えない。妹の手でランプがつけられた。父は田舎から來た長い手紙を丁寧に巻いて封筒に収めた。

「何を云つて來たんでせう。」母は重さうに首を傾げて尖つた聲で訊いた。

「清衛が目が悪いのに、平八が重いインフルエンザで、今月になつて些とも仕事が出来んのださうだ。」と、父は事もなげに云つて、「平八も若い間に勝手な事をした報いだから仕方がない。」

「よくそんなに根氣よく手紙を寄越せるものだ。平生は端書一本呉れない癖に、少し工面が悪いと無心ばかり云つて來て。」と、母はツケ／＼云つた。

「お種のことも一寸書いとるけれど、平八の云ふことはうっかり信用が出来まいよ。尾ノ道の材木問屋の息子が是非周旋して呉れつて頼んでるから、次手があつたら寫眞を送つて呉れと云ふんだが……。」

「へえ、尾ノ道の人から頼まれたんですつて、そんな遠方では話にもなりやしない。」さう云ひながら、母はその男の素性などを父に問ひさうとした。父は手紙にあるだけの事を氣乗りのしない口振りで話した。

眞造は食卓についても、何時ものやうに進んでその日の噂をするのではなく、両親の素振りにのみ目を留めてゐた。母はキョト／＼皆な顔に目を配つて忙しさに食事をする。父は緩くり嚙占めて不味いものを旨さうに食べてゐる。食事が済むと、父は用算筒から帳簿を出して算盤を弾き出した。貸金か預金か、此頃の父は帳簿の調べが唯一の道樂になつてゐる。田舎では一時凝つてゐた謡曲も、謡はなくなつた。

眞造は算盤に向つてゐる父の目の、次第に險しくなるのを感じて、見てゐるのも厭であつた。

「僕は風呂に入つて来る。」と、わざと威勢よく云つて、母から湯銭を貰つて戸外へ出た。珍らしく長湯をして歸ると、二階の書齋にはランブが明るく點いてゐる。父に隠して此頃吸ひ覺えた巻煙草に、火をつけたまゝ、袂に隠して、ソツと階子段を上つた。机に寄つてお種が雑誌を讀んでゐる。音のせぬやうに疊の上に腹這ひになつて、煙草を出して吸うてゐると、「あら兄さん、私些とも知らなかつた。」と、お種が胸を轟かせて雑誌を伏せて振向いた。赤く太つた頬には笑窪が見えた。

「何を讀んでるんだい。」眞造は横からその雑誌の表紙を見た。

「日笠さんの紀行文は随分六ヶ敷いのね、よう分らんわ、先日新聞に出てゐた『朝』といふ小品文は分つたけれど。」先月田舎の女學校を卒業して來たばかりのお種は、覺えかけの東京言葉で云つた。

「お前のやうな田舎ツペいにや分るまいよ。」と眞造は手を伸して雑誌を取つて、「三行讀んだが、面白くないので、其處へ投出して、『學校でもこんな雑誌を讀んでたのかい。』

「うん。」とお種は卑しく首を振つて、「内所で讀んでたのが分つてから、急に嚴しくなつて、一冊も持つてゐられんやうになつたの。東京の女學生はどんなものを讀んでて。」

「雑誌屋に出てるものは何でも讀んでるだらうよ。お前もこれからセツセと雑誌勉強でも始めさ、どうせもう東京の學校へ入れつことはないんだから。」

「私、もつと學問したい。」お種は兩手を机の上で組んで、無邪氣に身體を動かして、

「兄さん達は自分の好きなだけ學問してるんだから、私だつてもつと學校へ行かなくつちや詰らないわ。」

「お前の友達で此地の學校へ入つた人があるのかい。」

「あつてよ、二人あるの。今月二人とも女子大學へ入つたの、吉住さんと長濱さん。二人とも私より學校の成績が悪かつたのだから。」

「成績なんかどうだつていいさ、女の學問はどうせ贅澤なんだから。お前も財産家の家に生れ

てりや、洋行でも出来るんだけど、こんな貧乏な家ちや、女に贅澤學問をさす餘裕はありやしないよ。」

「さう云へば兄さんの學問だつて贅澤でせう。今時大學を卒業したつて、そんなにお金にならないんでせう。」

「おれは月給取りになりたくつて學問をするんぢやない、精神的の大事業をするんだぞ。」と、眞造は氣取つて云つた。

「ぢや兄さんのやうになるのね。」と、お種は笑つた。そして近視らしく目を細めて、不器用に十字を切つて、壯吉の眞似をした。

「馬鹿だなあ。」と云ひながら、眞造もつい釣込まれて笑つたが、やがて、「おれは責任が重いんだから、お前も浮々してちや駄目だよ。」と眞面目になつた。

「私だつて責任が重いわ。女だつて兄さんが思つてゐるほど浮かりしちやあませんよ。」

「そんならい。」眞造は妹の苦のなさうな風を見た。そして今の中にこの女一人だけでも片付けたいと思つた。男の家柄や地位はどうであらうと、財産のある家へやりたいたいと思つた。しかし今それを口に出して云ひかねて、「種ちゃんは今これからお母さんの世話をしなくちやならんよ、あんなに身體が弱いんだし苦勞性だから。」と柔しく云つた。

「え……お母さんはお父さんに對して、もつと權利を主張しないから駄目！」

「女はそれでいいんさ。」何のつもりもなく眞

造は云つた。新聞紙に落してゐた煙草の灰を庭へ棄てながら、階下の静かなのに心を留めて、「お父さんはゐないんか。」と訊いた。

「どうだか、私お父さんのことなんか知らない。」

その剛情らしい言葉を眞造を忌々しく思つた。

四

「お母さんもゐないよ。」と、妹は階下へ下りて視察して來た。

眞造は胸をどき／＼させたが、「ぢや、お前階下で留守番しといで。」と、平氣らしく命じた。

「何處へ行つたのだらう、臺所の障子を開放しにしちゃつて。」

「だから留守番しといでよ、無用心だから。」と、眞造は妹を階下へ追遣つた。そして障子を開けて、心當てに母の行先を眺めた。暗い樹木の中に燈火がチラ／＼見えたが、その近くの一つが母を導いた光だと思はれた。父の通つてゐる女の家へ後をつけて行つたに違ひない。無分別な外聞の悪い眞似をしなければよいが。……彼れは母に同情するよりも、その狼狽した端ない仕業を憎んで、荒立てないで父のなすまゝに打遣つて置けば、世間にも知れないし、父もさう財産を傷けるやうなことはしないだらうにと、母の焦々した火花のやうな性分を厭うた。

燈火は動きもせず消えもせず其處を照らしてゐる。空は曇つて、底冷い風が肌に染んだが、

眞造は手欄の側を離れないで、厭らしいその場を想像した。——十年前田舎の中學に通つてゐた時分、父が町外れの淋しい家へ若い女を置いて、それと氣付いた母が跣足で駈込んで釣ランブを叩落した騒ぎがあつたが——

其處のランブはまだ光つてゐる。それを見詰めた眞造の心には五分か十分の間も長く待遠しかつた。疑ひと恐れが續いて起つた。

「お母さん。」妹の周章しい聲が、不意に彼れの心を呼醒した。耳を留めて階下の様子を窺つてゐると、母は「兄さんは。」と、妹に向つて訊いた。「二階で勉強しとる。」田舎びた聲で妹は答へた。

間もなく母は階子段を上つた。眞造は怖いものでも來たやうに、ソツと顧みたが、母の目付は異様に光つて小氣味悪く見えた。聞きたくもない事を聞かされるだらうと心で後退りされた。「今大野のお爺さんに會つて相談して來たんだがね。あの人も身を入れて聞いて呉れさうぢやない。あんな手頼りにならん人でもなかつたのに。」母は火鉢を隔てて腰をも落着けない。

「さう他人に立入つた話をしない方がいゝでせう。」眞造は大人振つた口の利方をして、「お父さんはどんな場合だつて身代を叩潰すやうな人ぢやない。」と云ひながら、十年前にもさうだつたと思つた。

「それにしてもお前、自分のものは子供にも譲らないと云つてゐるんだからね。これ迄とは違つて、役所は止めるし歳も取つたんだから、お金

を持つてゐなくちや淋しいつて、大野へ行つてもさう云つてゐるんださうだよ。」

「それ程好きなお金なら、無くさなりやしないさ。僅かな月給なんから拵へた財産だから、惜しいのも無理はないんだ。」

「だけれど此頃は餘程調子が變なんだから、どうするか分りやしない。昨夕だつてお前、子が子らしくないから、家にもゐても面白くないと云つて外へ出て行くんだもの。」

「だつて僕もお父さんの金の話ばかり聞いちゃゐられないさ。それに兄さんはあゝだし、僕が學校を出るまでは、財産の減るのは覺悟してなくちやならんさ。せめてお種だけでも早く片付けたらいいんだが、何處か田舎の財産家へ遣つてけば、この先お母さんもまさかの時に手頼りになれていい。手頼りになれる親類でも遣つとかにや困る時がありますよ。」

「だけれど親類なんか當てにならないよ。實の親だつてあんなになるんだから。」と母は刺立つた調子で、「今の中にお前が確かり勉強して、早く卒業して皆んなの世話をしなくちや。」

「えい。」と生返事して、眞造は左右から壓迫されて居るやうに感じた。母をも避けて一人でゐなくなつて、「まあ心配しないでいらつしやい、私もよく考へとくから。」

と、机の方へ向直つて、書物の頁を繰つた。そして母が遠慮して階下へ下りるを待つて、仰向けに寝て手足を伸した。昂奮した頭には數多の不快な姿が忙しく浮いては消えた。茶の間で

は母が絶間なく喋舌つてゐる。何時ものやうに妹をして父に背かすやうな話をしてゐるのだから。彼れはこの家を飛出て自分一人きりの氣儘の生涯を始めたくなつた。兄のやうな境涯も羨ましい。親には離れ兄弟もなかつた若い時分の父の境涯も不仕合せとは思はれない。

ふと玄關の格子戸が靜かに開いて誰れかの聲がした。

「壯さかい、此頃ちつとも來ないんだね。」と母が云つた。

「私も此頃は忙しいんです。今日眞造が來て呉れましたよ。お母さんも暇があつたら入らつしやい。あの魚屋は三井家へ出入するんだから、いゝ魚があるんです。今度お母さんにも御馳走しませう。」

「まあ此方へ上つたらいゝぢやないか、そんな處へ突立つてゐないで。」

「今夜は緩くしちやゐられません。今護國寺まで行つて來たんですが、何だか氣掛かりだつたから一寸寄つて見たんです、これから歸つて又仕事があるんですよ。」

眞造は兄の歸つて行く下駄の音を聞いてゐた。何と思つて不意に寄つて不意に去つたらうかと、晝に見た醜い兄の顔が物凄く思はれた。

五

我知らず吸ひ過ぎた煙草に舌を痛くして、その夜は寢苦しかつたが、明方になつてグツスリ寢入つて、目醒時計の音をも知らずに過ぎた。

妹が兩戸を開けて呼醒すのを夢の中に聞流した。

快く眠足つてやう／＼目を醒すと、枕許の障子が開いてその側には父が胡坐を搔いて、煙管で長閑に煙草を吸ひながら、降瀝ぐ雨に煙つた谷向うの高臺を眺めてゐる。父は若い時分から早起きが癖で、役所を止めてからも、日の出る前に目を醒して家の者を呼起すのが例になつてゐて、此頃でも一日も違へたことがない。そして帳簿調べの外に用事もないし娛樂もなければ、煙草盆を提げて二階へ上つて、何處ともなく眺めては三四時間を過すことがある。此頃は眞造が側にゐてもさう話を仕掛けず、靜かに朝な朝な春景色を眺めながら、何かしら考へてゐる。

「よく眠つた。」と、眞造は欠伸をして起上つたが、父は素知らぬ風をして一方に目を注いでゐる。顔を洗つて朝食を食べて來たが、父は身動きもしてゐない。口髭を剃落してから一層平たくなつた肉付のいゝ顔は、土氣色をしてゐれど、まだ朽ち衰へた風はない。煙管を持つた手は骨が太くて濃い毛が生えてゐる。迫つた眉の間には高く皺が寄つて目の邊には凄味があつた。眞造は見るともなくソツと父の様子を見詰めてゐたが、やがて袴を穿いて風呂敷包を抱いて、「行つて來ます。」と言ひ置いて階下へ下りた。

父は暫らくして不精らしく立上つて、本箱や油繪の額を見ながら、二三度部屋を歩き廻つて階下へ下りた。お種は不行儀に腹這ひになつて雑誌を讀んでゐる。

「種も大分東京になれたから、そろ／＼裁縫の稽古でも始めにやなるまい。」と、その側に立ちながら見下して云つた。

「誰れが裁縫を習ふものか。」お種は小面僧い口を利用して、尙雑誌を讀續けた。聲を出して讀出した。

「女が裁縫を知らんと、嫁に貰つて呉れる所はないぞ。」

「なくつたつて些とも困らない。」

「お前は困らなかつたつて、お父さんが困るぢやないか、女が年頃になつて衣服一つ縫へんやうぢや外聞が悪い。お父さんまで恥かしいぢやないか。」

「フウン。」と小さい聲で嘲るやうに云つて、「そんなに世間に恥かしいやうな子を生まなけりやいゝ。」と、わざと雑誌を持つて横へ向いた。

「さうだ、生まなけりやよかつた。氣狂ひや親不孝ばかり生むつもりはなかつた。」と、父は自分をも嘲けるやうに云つた。そして口を噤んで、淋しさうに坐つてゐた。母がお種を指圖して雜巾掛をしたり、二人で絲巻に絲を巻いたりしてゐるのを、他所の人のやうに見てゐた。臺所の御用聞の外に訪ねて來る人もない。表の格子戸の鈴は一度も鳴らなかつた。用事のない父は正午まで一處に坐つてゐた。母は仕事をしながらも、白目を寄せてはチラ／＼父の方を疑ひ深く見た。

田舎にゐた時分には、座敷の床の下に小さい

瓶を埋めて、その中に月々餘つた銀貨銅貨を收めて、暇な折々取出しては數へて見るのが楽しみだつたが、今はその楽しみすら得られない。預金帳や貸金帳を檢べるのは、現金を并べて見るほどの興味もないし、毎日では楽しみも薄らいだ。それに外に収入の道もないので、帳簿の金高も減つて行くばかりである。月々減つて行くのが身を切るよりもつらい。眞造の學資や、壯吉への無駄な仕送り、月々心に深く染込むやうになつた。

で、彼れは屢々高利貸でも始めようかと思つた。大野の老人が自分で片棒擔いで周旋役になつてもいいと勧めたこともある。今もその氣の起らぬでもない。だが、それに伴つた危険に思ひ及ぶと、容易に手出しをする勇氣はなかつた。「彼奴が來たのが些とは家の利益になつたらうか。」彼れは弱々しい老込んだ妻を見てはさう思つた。そのキョト／＼した風をして、落着きもなく、始終家の中を動いてゐるのも五月蟬かつた。

午餐を食つてからは、毎日の例として、一時間ほど晝寢をする。目が醒めると、果物が旨い物を食つて、徒らに日の暮れるのを待つばかりである。今日は眞造の歸る前に、退屈醒しに近所の大野を訪ねた。其處の老人は昔の私塾友達で、一時は可成りの財産をもつたが、いろいろの商賣で失敗り續けて、今は横濱の商館に奉公してゐる獨息子からの仕送りで、貧しい生活を立ててゐる。澤井吉文が職を失つてから東

京へ移つたのも、この老人の手紙の文句に乗せられたからであつた。

「よく降るぢやありませんか、私共は雨だと一足も戸外へは出られませんよ。」と、眼鏡を外して、讀掛けの義士傳を押しのけて客を迎へた。吉文はムツリして座に就いた。

「貴方は何時も御丈夫で結構だ、私は此の二三年根がなくなつてしまひましたよ。第一眼が悪くつてね、眼鏡なしぢや新聞を一行も讀めませんで。」と、老人は口を利く度に身體を震はせた。

「お互ひに年寄の仲間入をしたのだからね、細かい譯さ。」と、吉文は幽かに笑つた。

「しかし貴方は若いよ、懷に餘裕があると歳を取るのも遅いと思えますな。」と、冷かすやうに云つた。「どうです、先日お話の旅行は。私も都合がつけばお伴したいんだが、今の所少し實行が六ヶ敷いので残念だ。まあ夏になつたら、今年は久振りに温泉へでも行かうと思つて、今から楽しみにしてゐるんです。」

「いや、私も當分は旅行を見合せませう、その前に家の事をちゃんと極めときたいと思ひます。今のやうだと經費が膨脹するばかりで不安心でならない。」

吉文は永く一人で眞面目に思ひ詰めた別居の計畫を話して、老人の同意を得ようとした。最も親しいこの人から眞造にも話して貰はうとした。自分自身が直ぐに話すのは後見たい氣がしたのである。

老人は相手が鹿爪らしく話すのを、竊かに面白がつて聞きながら、「それもさうですな。」と軽く首肯してゐた。

「私も若い時分から苦勞ばかりして來たのだから、これから少しは樂をしなくちやなりません。もう先が短いのに、生活の心配ばかりしてゐちや、折角苦勞の仕甲斐がなかつたやうなものだ。」と、吉文は沁々と感じて云つた。

「それもさうですな。しかし眞造さんは私の家の小僧とは違つて順當に大學を卒業なさるのだから、將來の確かな當てがついてゐるんですさあ。」

「いや、あれも鈍物らしいからどうなるか分りません。それに私が側についてちやあの子の爲めにもならん。學資は寝てゐても自然に湧いて來るやうに思つて、艱難辛苦の味ひを知らないから、學問にも身が入らん譯です。私共お互ひに若い時分には生柔しいことで學問したのぢやなかつた。」

「火の氣もない處で素給で我慢してゐましたつけな。」

「眠くなると井戸端へ駄付けて、ザブ／＼釣瓶から水を浴びたこともあつたが。」

「いや、あれが螢雪の苦みで本式の學問でせうな。今時ストーブの側で電燈で勉強するのは譯が違ふ。」

二人は互ひに昔を思出してよく話が合つた。暫らくは懐かしい追憶の心が浮んで、目の前の慾も得も忘れてゐた。

「兎に角決心なすつたのなら、少しの間でも望

み通りにやつて御覽なさい。私も掛かり合ひで仕方がない、御子息にも話すだけは話して見ませう。」

「さうして頂けると私も非常に有難い、無論あれだけの人数で食つて行けるだけのものは付けてやるつもりです。私が離れりやどうせ貴方に監督もして貰はねばならんのだから。」

吉文は老人の同意を喜んで、財産の分配に立會つて貰ふ約束をした。

六

二三日過ぎた、大野老人はまだ訪ねて来ない。

吉文も朝の内の静坐と帳簿いぢりと、夕方からの妾宅行との外に不斷と異つたことはない。澤井の一家に目に見える波は立たなかつた。眞造の不安は自然に薄らいだ。母の事々しい告口さへ避けてゐれば、何事をも掛念しないで日を送られた。で、學校から歸つても、食事の外は二階にのみゐて、減多に茶の間へ顔出ししなかつた。たまに母が物云ひたげに側へ来て、外すやうに努めた。何かに託つては屢々戸外へ歩いた。或晩、「兄さん、何處へ行くの。」と、遊び友達のないお種は、ステッキを持つてブラブラ出掛けて行く兄を羨ましがつた。「お母さんと私と毎晩留守番ばかりさせられて、本當に詰らないわね。」と母に訴へた。

「お前一人何處へでも遊びに行つてお出でよ。電車にさへ乗れば賑かな處へ出るのに造作もななんだから。」

「だつて私一人ぢや、知らない町は恐いわ。お母さんも行くといふんだけど。」

「お前、一人で歩くのが恐いの。東京の町は田舎のやうに暗くはないんだよ。」と、母は笑つて押揃ふやうに云つた。

臆病者とても云はれたやうに、お種は負けぬ氣になつて、「ぢや私、一人で行つて来る。」と力んだ。二三度母や兄に連れられて、上野や向島の花を見たばかりで、東京に馴染んでゐないので、氣臆れもしたが、一人氣儘に歩きたい好奇心もあつた。そして母が道筋を彼れ此れ教へるのも耳にも入れずに、裏口から垣根の狭い道を傳つて通りへ出た。田舎者らしく見られぬやうにと傍目も觸らずにスタ／＼歩いた。左右は次第に明るくなつて、傳通院前まで来ると電車の響や、夜店を圍んだ人ばかりで逆上るやうになつた。賑かな大勢の中に割込んで行くのも一人では心細くなつて、ふと思出して壯吉の家を訪ねた。あの兄を連出して、其處等を散歩しようと思つた。

魚屋の二階には、古新聞を笠にした小さいランプが疊の上に置かれてゐる。氣味の悪いほど薄暗い。明るい外から來ると穴倉へでも入つたやうだ。兄はキチンと坐つて、ランプを隔てて脇枕で横になつてゐる男と、元氣のいい聲で話をしてゐた。

「一人で來たのかい、よく來たね。」と、壯吉は愛想よく妹を迎へて、前からの話を續けた。お種は洋語交りの理窟っぽい話が面白くなく

て、隅の方で手持不沙汰にしてゐたが、やがて其處にゐる男が、かねて聞いてゐた日笠だと知れた。身袋や顔付も兄に似て書生染みてゐて、豫想とは全で違つてゐるのを不思議がつた。日笠は壯吉の議論を言葉少なに聞いてゐたが、やがて生欠伸をして身を起して、

「ぢや、君の大事業が成功して理想の養育院でも建つたら、僕も其處へ入れて貰はうかなあ。」と云つて、お種の顔を横目で見た。

「あゝいゝとも、だから安心してゐたまへ。僕一個はどうせ君達のため人類全體のために犠牲になるんだからね。」と、壯吉は音樂的に輕快に云つた。犠牲とか人類全體とかいふ言葉は彼自身の耳にも氣持よく響いた。

「令妹は何か用があるんぢやないか。」と、日笠は注意した。そしてあまりに迫つて來る壯吉の議論を避けるやうに、立上つて椅子に腰を掛けた。

「種ちゃん、用事はないのだらう。まあ樂にしておいでな。」と云つて、壯吉も立上つて机の側に寄り、「僕は家の事は弟に任せてゐるから、家庭の用事は少しも僕にないんだよ。」と、日笠の耳元で聲を強めた。

「長男がそんなに無責任ぢや困るね。」日笠は空噓いて、格子の側へ顔を捻向けて賑かな人通りを見た。

「無責任かね、君……だつて僕は天主教へ入つてから童貞の誓願を立ててゐるんだよ。一人が童貞の生涯を送れば、その一族は如何なる罪があ

らうとも、未來永遠に救はれるんだからね。饅頭家庭の事に關係したり、外形的の親孝行をしたり、そんな客臭い事をしなくつたつて、僕は一族の靈魂を救つたよ。」と、さも得意らしく云つた。

「童貞の誓願まで立てたのか。」日笠は決心に驚いたやうに振向いて、「君はもう三十四歳だが、一生清淨潔白で送るのかね。」

「童貞の一生はど尊いものはないんだつてね。僕は半歳ほど尼寺に住んでたが、女も尼さんは神聖なものだよ。」

「どうだかそれや分らんね。しかし君は婦人を斷つてしまつてから、今迄一度も後悔したことはないかね。」

「一度誓つた以上は決して破ることは出来ないよ。僕の一族は僕によつて救はれてるのに、それを再び地獄の底へ墜せるものか、その代り僕が清淨である限りは家の者は安心していゝんだ。母や弟がよく家庭の事を苦にするけれど、それは畢竟僕の信仰に手煩つてゐないからなんだよ。さうだらう。」

「さうだらうね、僕も一人君のやうな兄弟を持ちたいものだ。さうすれば未來の保證がついてるから、生きてる間は思ひ切り慾望を恣にするんだが。」

壯吉はニヤリと笑つて、「僕の一家は幸福だよ。」と云ひながら机の引出から、黒い海松のパイプを搜出して、「これは田舎の宣教師に貰つたんだが、僕にや無用だから君に進呈しよう。

宣教師が町の店でこれを見付けて、十本ばかり皆な買占めて、僕等に分けて呉れたんだよ。」と、手でパイプを小磨つて、日笠に渡した。

「其處に置いてある書物も大抵同じ宣教師から貰つたんだが、その中で讀みたいものがあつたら、どれでも持つて行き給へ。僕はもう書物は入らないんだから。」と調子に乗つて、其處等にある持物の凡てを日笠の手に押付けさうな勢だつた。

日笠は五月蠅がつて、「もう澤山だよ。」と、パイプだけ袂に入れて、机の上の烏打帽子を被つて歸りかけたが、壯吉は強ひて引留めようとした。「もつと遊んで呉れたまへ、君に話したいことがまだ溜つてゐるんだよ。好きな物を何でも奢るから、もつと聞いて呉れたまへ。ねえ、いゝだらう。此處で燈火をつけないで考へてると、色々世間の人の知らん事が考へられるよ、時々不思議な聲が聞えるよ。」と、死靈でも乗移つたやうな素振りをして、聲をも潜めた。「さうかね、しかし今夜は二時間ばかり君の議論を聞いたんだから、それで澤山だよ。後は又この次に承りませう。」

「どうしても歸るんかねえ。」

壯吉は唯一人の徒弟と思つてゐる日笠に離れたくはなかつたが、日笠は容赦なく振放して二階を下りた。そして頭の輕くなつたやうに感じた。

「彼れにまだ詳しく云つときたい事があつたのに。」と、壯吉は階下まで見送つて來て獨言を

言つた。喋舌り疲れてガツカリして、壁に凭れて首垂れて目を瞑つた。

「兄さん、そんな風をしてどうしたの、何か氣味が悪いやうだわ。」お種は初めて口を利いて、ランプをテーブルの上に置き、グツと心を繰上げて、出来るだけ明るくした。そして焦付いた笠を取除けて、書汚した半紙で新しい笠をつくつてゐると、壯吉は怪しい夢から醒めたやうにキョト／＼部屋の中を見廻しながら手を振つて、

「ランプは下へ置け、テーブルの上だと外から見えていかんよ。」

「何故見えちやいけなないの、ランプは疊の上に置くものぢやないわ。」

「馬鹿ッ。」と、例にない慥食な聲を出して、壯吉は妹の手からランプを奪つて下へ置いて心を引込めた。

お種は呆れて兄の顔を見てゐたが、その顔は次第に怖くなつた。

壯吉は後退りして元のやうに壁に背を擦付け、首を垂れて口を嚙み、傍に人のゐるのも忘れてゐた。

今朝早くから支局の集金掛りのお伴をして、小石川區内を殆ど残りなく引廻された上に、久振りに逢つた日笠と話込んだため、身體も心も不斷より疲勞して、稍々もすればウトウト居眠りをしさうになつた。だが、今夜はまだ計畫すべきことが残つてゐるので、自分で心を引立てて、瞼を張つて眠入らぬやうに勉めた。薄暗い中に白い目が開いたり閉ぢたりした。